

インテリジェンスとは何なのか

高市早苗政権はインテリジェンス強化に向けて取り組んでいる。ところで、そもそも「インテリジェンス」とは何であろうか。世界の諜報業界にある暗黙の共通理解を知らなければ、我が国のインテリジェンス強化の議論がピント外れとなる虞がある。そこで、本稿ではその共通理解について確認してみた。

政策支援、戦争、外交……

或る研究者は、インテリジェンス（以下「諜報」）を「国家が外交や安全保障の政策決定に役立てるため、情報を収集・評価すること」と定義している。要するに、政策決定支援機能である。これが我が国の一般的理解かも知れない。確かにこれは諜報の重要な機能である。しかし、諜報の実態は遥かに広汎なものである。

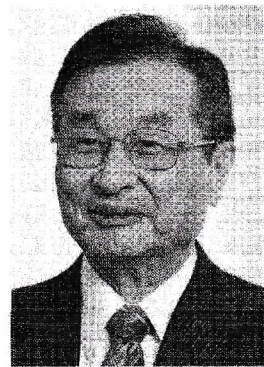
先ず、古来、戦争や軍事作戦には諜報が不可欠であった。最近の米・イスラエルによる対イラン攻撃や、米国によるベネズエラのマドゥロ大統領拉致作戦でも、諜報力が発揮されている。

また、ロシア・ウクライナ戦争

を見ても、軍事作戦の前提として敵軍についての情報は不可欠である。加えて、両国ともに、後方攪乱のための破壊活動や暗殺、更にはSNSを使った欺瞞・宣伝などの情報作戦も実行している。更には、通信システムやインフラに対するサイバー攻撃も実行している。全て諜報活動である。

次に、外交交渉においても諜報は重要である。第一次世界大戦後のワシントン軍縮会議で、米国が日本の外交暗号を解読して交渉を優位に進めた事例は有名であるが、諜報による外交支援はこれに限られない。漏洩資料によれば、2009年のG20ロンドン合会では、英国機関は通信傍受によって各国代表団の状況について適時適切な情報を提供して評価されている。また、07年のアラブスプリングの際には日本代表団の通信傍受により米国代表団を支援している。外交交渉

正論



インテリジェンス研究者
茂田 忠良

渉とはポーカールームのようなものであり、相手の手札を知らば交渉を優位に進められるのである。

科学技術や産業スパイでも

戦争支援や外交支援の他にも、諜報には各種の機能がある。科学技術や産業スパイは顕著な例である。例えばソ連や中国の核爆弾開発では、対米スパイ活動の貢献が大きい。また、米CIAによる反米国家の政権転覆、コミンテルンや中国共産党による暴力革命の輸出も行われてきた。現在イランは

イスラム革命を輸出している。また、政治家や有力者に対する積極工作によって政策への影響を与える活動もある。SNS上で偽情報による世論工作や選挙干渉など情報作戦も行われており、近時、中国による対日取り組みが強化されている。またロシアは平時でも暗殺を好み、米CIAは21世紀に入りドローンを使った「テロリスト」殺害（「標的殺害」）を多数実行している。その他、米

撃をかけた。以上は例示に過ぎず、諜報活動、そして秘密工作には、実に多種多様なものがある。このように諜報活動は様々な分野で攻勢をかけているが、国家安全保障の観点からこれに対抗して防禦する諜報活動もある。これは主として、セキュリティ・サービスが担当している。

諜報の世界観と国際政治

このように「汚れ仕事」も含めて、幅広い諜報活動が存在するのは何故だろうか。それは、国際政治の特質による。

国際政治とは、各国の国益を懸けた戦いの場なのである。この点について、帝国主義華やかなりし1848年、英国のパーマストン卿の議会発言が有名である。「我々には永遠の同盟国も不変の敵国もない。永遠かつ不変なのは我が国益である。国益追求こそが我々の義務である」と。

このような国際政治観を19世紀の遺物と考える人がいるかも知れないが、諜報の世界では生きてい

るのである。米国の国家シグナツの核燃料濃縮工場にサイバー攻

（年付）には、同様の記述があり、当該部分は2007年に機密解除されている。つまり、この認識を当然視して開示したのである。この感覚こそ、諜報の常識であり、基礎知識なのである。

国際政治の主たる手段は、軍事力と外交力、そして諜報力の3つである。そして諜報には、外交以上戦争以下、そして戦争と外交以外の全ての活動、「汚れ仕事」が含まれるのである。我が国がこれら諜報活動の何処まで取り組むのか、慎重な検討が必要である。

さて、一部政党は、CIAに倣った対外諜報機関の設置と、非公然活動（Covert Action）秘密工作）任務の付与を提言している。仮に、秘密工作にまで踏み出すのであれば、対外諜報機関に丸投げすることなく、政治家が責任を持って決断して実行させ、結果責任を負う必要がある。米国はナタツツ攻撃や標的殺害など各種の秘密工作を行っているが、大統領の個別の決裁を得て、大統領の責任において実行されている。政治家の覚悟が問われるのである。（しげた たたよし）